

平成 23 年 3 月 4 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530545
 研究課題名 (和文) 東アジアからのケアワーカー導入に際する異文化意識緩和にむけた
 福祉実習教育の方法
 研究課題名 (英文) Care Practice Training Method for Reducing Cross-Cultural Frictions
 Which Face Trainees of Care Worker from East Asia.
 研究代表者
 益満 孝一 (KOICHI MASUMITU)
 九州看護福祉大学・看護福祉学部・社会福祉学科・教授
 研究者番号：40296372

研究成果の概要 (和文)：本研究の目的は、東アジアからのケアワーカーの導入に際する異文化意識緩和にむけた福祉実習教育の方法を明らかにすることである。そこで、日本で社会福祉実習を行っている韓国学生に構成的グループエンカウンター(Structured Group Encounter)を活用した聞き取り調査を行った。ピア・インタビューの分析結果より SGE の有効性、さらに受け入れ側の日本人による肯定的関心、気配り、優しさなどが有効であることが示唆された。

研究成果の概要 (英文)：The aim of this study is to reveal a method of the care practice training for reducing cross-cultural frictions, in the case of introduction of trainees of care worker from East Asia. An interview survey using Structured Group Encounter was conducted on students from South Korea. From the result of peer interview, it suggests the presence of effectively of SGE, also positive interest, sensitivity and kindness of Japanese who take in trainee care workers.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：国際社会福祉，異文化間意識緩和，福祉実習教育，異文化福祉実習，構成的グループエンカウンター(SGE)

1. 研究開始当初の背景

近年、少子高齢社会の進展するなかで、わが国の高齢化と少子化にともなう福祉従事者の人材不足が指摘されている。この高齢者

のケアの担い手の不足問題が社会問題化し、外国人の看護師・介護福祉士の労働力のニーズも高まっている。

厚生労働省の統計によれば、現在約 2500

万人の高齢者（65歳以上）人口は、2020年に3300万人（そのうち半数が75歳以上）以上になると予測されている。また高齢者実数の増加にも増して少子化の影響により総人口に対する高齢者人口比は2020年には26.9%、2050年には32.3%と未曾有の勢いで増えていくと考えられている（厚生労働白書）。こうした超高齢・人口減少社会を迎えるにあたり、介護を要する高齢者の介護業務を適切におこなう環境づくりは焦眉の課題である。特に介護業務をおこなう介護者のマンパワーの問題は避けて通れない。この議論の中でたびたび政治的なテーマとして浮上るのが外国人の看護師・介護者を日本に迎え入れるか否かであるが、この問題は現実的な問題となってきた。

こうした中で、経済連携強化とともに人材交流について経済連携協定（EPA: Economic Partnership Agreement）や自由貿易協定（FTA: Free Trade Agreement）によって、我が国の看護師・介護福祉士の労働市場の開放が進展している。ところが現在外国人介護者を受け入れたときの具体的な養成訓練の方法論や教育カリキュラムの等に関する研究は皆無に等しい。これは日本が地理的に「島国」であり、今まで一部の専門職を除き他国の人々を労働者として迎え入れてこなかったという国策が影響している。こうした現状は社会福祉領域に関しても同じである。現在日本で働く海外の福祉専門職の研究についての事例も見あたらない。しかしケアワークをはじめ社会福祉の援助とは利用者の身体的介護のみならず、利用者とその家族の生活困難に対する援助が大きな割合を占めている。そのため利用者との信頼関係は不可欠な援助要因になる。こうした専門的援助関係を形成するには特にサービス提供者がコミュニケーション能力を高め、利用者の文化を知り、文化間ギャップから生じる障害を克服しなければならないが、実際にどのような課題が出現するのかさえ定かではない。これは将来介護をうける利用者にとって憂慮すべき事態と考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、将来急激に増加する可能性が高いと言われる海外の介護者が日本人の利用者をケアするうえで想定される文化間の障壁に焦点をあて、①実際のケアにおいて異文化意識の緩和をどのように行うか、②異文化意識や異文化ギャップがケアにどのような影響を与えるのか、③異文化意識を生

じさせる要因は何か、④そして異文化意識の緩和にはどのような福祉臨床教育をおこなえばよいかを明らかにする研究である。

本研究は日本で定期的に社会福祉実習を行っている韓国実習生の協力が得られることになった。韓国実習生が直面する課題は、日本で就労するフィリピンやインドネシアなど国外の介護者がサービスをおこなうときに顕在化する課題と類似あるいは共通すると推測できる。したがってこの韓国実習生が直面する異文化に関する援助的課題を明確化する意義は大きい。さらにその課題を克服するための社会福祉実習の教育カリキュラムを仮説・検証する社会的意義は高いと考えられる。現在、日本は外国人介護者を迎え入れつつあるが、海外のケアワーカー養成機関、日本の福祉職養成機関、施設現場の養成課程において、異文化間ギャップから起こる様々な障害について知識を教授することで、異文化間の意識の違いによるリスクを回避することが可能となるといえる。さらに、異文化ギャップを克服する技術を習得できるカリキュラムが確立されることで一層質の高いサービスが利用者に提供できる可能性が広がると考えられる。

3. 研究の方法

本研究の主なものについて報告する。

本研究では構成的グループエンカウンター（Structured Group Encounter: SGE。以下SGE）による方法で研究協力者の人間関係を形成し、人間関係の研修プログラムを実施した。その後、日本実習および日本文化などについての研究協力者の自記式の自由記述について分析を行った。韓国語で書かれた文章を翻訳し、その自由記述については、意味のある文章の群を作りそれを「カテゴリー」に集約し、KJ法による分類を行った。SGEとは、國分康孝・久子らにより1975年に提唱され、パーソナル・リレーション（感情交流）を主軸にし、これに若干のソーシャルリレーション（役割演技）を加味したグループ体験の場を提供し、その体験を通して各メンバーの肉体的成長を援助する方法である。教職員やカウンセリングの研修会等で全国的に普及している。肉体的成長とは自己発見である。具体的には、①思考、②感情、③行動の3領域のいずれかが拡大されるか、修正されることである。つまり、SGEは「ふれあい」（リレーション）と「自己発見」のための技法といえる。つまり、本研究は次の韓国学生にSGEを活用し、異文化意識の緩和にむけての福祉実習教育プログラムの開発を行った研究である。

研究協力者および研究時期：①研究協力者：研究協力者は韓国忠南 瑞山市（A 大学）の老人福祉学科学生および大学院生である。A 大学では、兵庫県尼崎近郊の特別養護老人ホームなどで社会福祉実習を夏期（7 月～8 月）と冬期（1 月～2 月）の年 2 回実施している。1 回の実習生は、20 人～30 人である。本実習は 1996 年から実施されており、2009 年までに約 500 人程度が実習を修了している。②倫理的配慮：韓国教員が韓国語で本研究の研究趣旨を説明し、研究協力者としての承諾を口頭で得た。研究データとして使用する自由記述については、個人が特定できないようにペンネームを使用する方法を用いた。最終的には承諾したもののみ提出する旨を確認した。

(1) 韓国学生による日本実習に関する研究

本研究では、韓国実習生に対する福祉実習教育プログラムの有効性について研究協力者の感想を中心に検討した。プログラムは「アサーション」をテーマとした。アサーションを採用することにより、研究協力者のアサーション能力を活性化するとともに、日韓の「アサーション」による相異を顕在化することを目的とした。

つまり、本研究は SGE 方式によるアサーションの体験型学習を実施し、その後 2 人組によるふりかえりなどによるグループインタビューを実施し、日本実習での異文化体験を相互啓発的に顕在化するものといえる。

①研究時期と場所：夏期実習後の実習生に 2007 年 10 月に韓国 A 大学において各 90 分で SGE 方式による「アサーション」に関するプログラムを実施した。研究対象者の年齢構成は 20 歳代 3 人、30 歳代 2 人、40 歳代 10 人、年齢不詳 2 人の計 16 人であった。

実習経験群：老人福祉学科大学生 3～4 年生 16 人

見学実習群：老人福祉学専攻・老年社会学専攻 大学院生計 16 人（本研究には未見学実習群 4 人も参加したが、発表目的から加えなかった）

以上、分析は大学生の実習経験群 16 人と、大学院の見学実習群 16 人を対象とした。

②調査内容：ペア・インタビューは、設定されたテーマについて、2 人一組で「話す人」と「聞く人」の役割となり、1 分間実施し、その後役割交替をする。その後、話したこと、聞いたことを記録する（5 分）手順である。相手の話に触発されて、話題が深まることと、共感によるカタルシス（心的浄化）をねらっている。話す時間が短時間であり、取

捨選択しないことにより、情緒的な話題になりやすい傾向がある。

「話す人」のテーマは次の通りである。

実習経験群：1. 日本での実習をとおして、あなたが今、感じていること、2. 日本での実習で楽しかったこと、ショックを受けたこと、3. 韓国と日本の違いについて：文化、人間関係、高齢者への関わりなど、4. ふりかえり：この研修全体をふりかえって

見学実習群：1. 日頃、あなたが日本国、日本人に思うこと、2. あなたが日頃、あるいは自分の人生で楽しいこと、3. 韓国と日本の違いについて：文化、人間関係、高齢者への関わりなど、4. ふりかえり：この研修全体をふりかえって

(2) 韓国学生による日本実習に関する研究 2

2009 年度は鳥インフルエンザの流行により、韓国への渡航調査研究や韓国人の異文化実習が中止となり、2010 年に実施した。韓国の大学の 1 コマの時間が 45 分であり次のように実施した。

①研究時期と場所：夏期実習後の実習生に 2010 年 8 月に韓国 A 大学において 45 分（韓国の 1 時限）で SGE 方式による「コミュニケーション」に関するプログラムを実施した。

研究協力者：老人福祉学科大学生 3～4 年生 31 人

②調査内容：ペア・インタビューは、設定されたテーマについて、2 人一組で「話す人」と「聞く人」の役割となり、1 分間実施し、その後役割交替をする。その後、話したこと、聞いたことを記録する（5 分）手順である。相手の話に触発されて、話題が深まることと、共感によるカタルシス（心的浄化）をねらっている。話す時間が短時間であり、取捨選択しないことにより、情緒的な話題になりやすい傾向がある。

「話す人」のテーマは次の通りである。

1. 役割「話す人」と「聴く人」による体験や自分の考えの共有体験

日本実習経験群：日本実習の感想について
日本実習未経験群：日本について思っていること（3 分）

2. プログラム「証明写真のように」では相手を見ることを通して、自分のことに気づく。人を見る体験をする（5 分）

3. あなたは、日本実習を経験してどのような気持ちになりましたか？（3 分）あなたは日頃、どのような思いがありますか。例：楽しい、悲しい、辛い、さびしい、ショックなど

以上の3つの体験学習についての記録を行う(5分)。

4. 研究成果

(1) 韓国学生による日本実習に関する研究 1・2

SGE方式によるアサーションの体験型学習について、日本実習および日本文化などについての研究協力者の自記式の自由記述について分析(2007年研究調査)を論述する。韓国語で書かれた文章を翻訳し、その自由記述については、意味のある文章の群を作りそれを「カテゴリー」に集約し、KJ法による分類を行った。

分析結果の概要は学会発表を行ったが、詳細な分析結果は、論文等で発表する予定である。研究成果の概要は次のようなものがあった。

1. 日本での実習をとおして、あなたが今、感じていること：日本人が高齢者を尊重していることや、韓国実習生への気配りなどの感謝などが印象としてあげられている。

2. 日本での実習で楽しかったこと、ショックを受けたこと：

楽しかったことは、観光旅行や百貨店などに行ったことがあげられていた。また、「言語が通じられなくて、翻訳ソフトを施設側が買って話そうとする姿などを見て、とてもありがたいと考へており、日本の文化が体験できるように気遣ってくれて楽しかったと話した。」とあり、受け入れ側の日本人の暖かさに有り難さや、親和感を持つものが多かった。

3. 韓国と日本の違いについて：

日韓の人間関係の違いとして、年上の前でタバコを吸う行為、日本人が個人主義だと思ふなどがあげられた。さらに、介護について、「韓国では厳しく男女を区分して介護する反面、日本ではそうした区分をせずに、していること。例えば、女性が男性高齢者のおむつを交換するようにするとか、実習生の前で患者のズボンをおむつを交換すること。」「何気なく他人に体を洗わせること」などがあげられていた。これは異文化ショックといえるものでもある。

4. ふりかえり：この研修全体をふりかえてとして「SGE方式の体験学習」に肯定的感想がほとんどであり、時間が短く感じられた、もっと話がかたかった。日本実習に行ったもの同士は共感できたこと、時間が経っていることで自分体験を整理し経験を深めることができたなどが記載されていた。初めての人と楽しく話したり、人との出会いについての新鮮さがあつたなどもあつた。以上のSGEの効果は日本人と実施した場合と同じ傾向が

示された。

本研究は、SGE方式を活用し、韓国学生のSGE体験と異文化体験により、異文化意識の緩和の要因を明らかにすることである。ペア・インタビューの質的分析は一大学だけの実習生であり、研究限界はある。本研究の過程で、日本留学生が韓国の大学教員になり、日本実習の推進者となっている。さらに、日本実習により、日本への留学生となる者が少なくない。このことと、日本実習生のペア・インタビューの分析から人と人との出会いと「優しさや親切」が異文化意識の緩和であり、異文化の壁を越えるものが示唆される。今後、本研究を研究成果からアンケート調査の項目を作成し、日本実習の経験者などへの量的研究による実証的研究に発展させたい。さらに、構成的グループエンカウンター方式を活用したプログラムについて、「異文化意識の緩和」に効果的プログラム開発を今後もすすめたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1件)

①張世哲, 益満孝一, 西原尚之, 東アジアからのケアワーカー導入に関する基礎的研究—異文化意識の緩和にむけた福祉実習教育の方法について—, 九州社会福祉学年報, 第1号, 34-42, 2009, 査読有

[学会発表] (計 2件)

①益満孝一・張世哲・西原尚之・田中顕悟, 異文化意識の緩和についての日韓福祉教育プログラムについて, アジア社会学・社会福祉院生国際セミナー第7回, 2010年3月9日, 長崎国際大学

②益満孝一, 張世哲, 西原尚之, 韓国実習生の異文化意識の緩和についての福祉教育プログラム開発について—構成的グループエンカウンターによる異文化意識の緩和と福祉教育的支援について—, 日本社会福祉学会九州部会第50回研究大会, 2009年12月19日, 沖縄国際大学

[図書] (計 1件)

①益満孝一, 西原尚之, 中里操, 尹靖水, 田中顕悟, 近藤和子, 茶屋道拓哉, 李玄玉, 張世哲他, 平成19-21年度科学研究費補助金報告書「東アジアからのケアワーカー導入に際する異文化意識緩和にむけた福祉実習教育の方法」, 2010年3月, 70頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

益満 孝一 (KOICHI MASUMITU)

九州看護福祉大学・看護福祉学部・教授

研究者番号：40296372

(2) 研究分担者

西原 尚之 (NISHIHARA NAOYUKI)

筑紫女学園大学・文学部・教授

研究者番号：50316163

尹 靖水 (YOON SOON)

梅花女子大学・現代人間学部・教授

研究者番号：20388599

中里 操 (NAKAZATO MISAO)

西南学院大学・人間科学部准教授

研究者番号：90269366

近藤 和子 (KAZUKO KONDO)

精華女子短期大学・専攻科教授

研究者番号：70342376

田中 顕悟 (TANAKA KENGO)

鹿児島国際大学・福祉社会学部・専任講師

師

研究者番号：30340368

(3) 連携研究者